

ジョクールによるケンペル『日本誌』の利用

——第一卷第五章の場合——

小 関 武 史

はじめに～ケンペルの『日本誌』とはどういう著作か

今年四月号の本誌に発表した論文において、私は『百科全書』の研究に際して典拠の綿密な調査が必要不可欠であることを説いた¹⁾。事典はその時代における知識の集成であり、多くの文献からの引用を含む。『百科全書』に収められた項目の思想は、典拠との比較分析を通して、典拠からのずれのうちに読み取られるべきものである。とはいえ、典拠の特定には多くの困難が伴う。時に引用は無断で行われるので、当時の基本文献を博捜しなければならない。そうした一般的な問題はすでに論じたところであり、ここでは繰り返さない。

ルイ・ド・ジョクール (Louis de Jaucourt) は、『百科全書』に収められた七万を超す項目のうち、四分の一に達する膨大な数を執筆した。編集責任者はディドロであったが、ジョクールの献身的な協力がなければ、この事業は決して完結しなかったであろう。その貢献の度合いは、とりわけ弾圧以降にまとめて発行された第八巻から第十七巻までの十冊において顕著である。ディドロは第八巻冒頭の緒言において、ジョクールに惜しみなく謝辞を呈している²⁾。しかし、内容に関しては、同時代人の評価は決して高いものではなかった。それは主として、ジョクールの項目が他の文献からの丸写しであることが多かったからである。これに対して、近年はジョクールの復権を試みる動きも見られる。ジャン・エシュレールの研究は、その代表と言えよう³⁾。確かに、適切な文献を選ぶジョクールの眼力には素晴らしいものがあ

った。しかし、本論において私が目指すのは、『百科全書』の中心的人物に独創性の観点から評価を下すことではない。徹頭徹尾実証的に、ジョクールによる典拠活用の実態を、ケンペルの『日本誌』と『百科全書』の比較を通して明らかにしたい。

エンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kämpfer) は、1651年にドイツのレムゴーで生まれた。オランダ東インド会社付きの医師として1690年9月から二年間日本に滞在し、その時の見聞を『日本誌』にまとめた。もっとも、ケンペルの生前は草稿のままにとどまり、遺品を買い取った英国のハンス・スローン卿がショイヒツァーに英訳させて、ようやく一般に知られるようになったのである。この英語版が出たのは1727年であるが、早くも1729年にはデン・ハーグでフランス語訳が出版されている。この一事をもってしても、本書が当時の知識人に大いに歓迎されたことが分かる。事実、十八世紀のヨーロッパにおける日本観は、ケンペルの『日本誌』によって規定されていたと言ってよい。『百科全書』に結集した文筆家も例外ではなく、彼らが日本について何らかの記述を行うときは、信用に値する文献としてケンペルを参照することが多かった。

『日本誌』のフランス語題は *Histoire du Japon* であり、「日本の歴史」を意味する。邦題では「史」ではなく「誌」の字を当てるのが通例となっているが、それはケンペルの著作がいわゆる歴史を論じたものではないからである。日本におけるキリスト教の歴史を詳細に述べたシャルルヴォワ (Charlevoix) 神父の *Histoire du Japon* が『日本史』と呼ばれるのとは、この点で対照的である。そのシャルルヴォワ神父はケンペルを強く意識しており、彼の書いたものは歴史ではないと批判している。これに対して、当時の旅行記を適宜要約して撰集を編纂したアペ・プレヴォは、ケンペルを擁護して次のように述べている。「シャルルヴォワ神父はケンペルに歴史家の資質がないと言うが、これは単に言葉のうえの問題にすぎない。[中略] ケンペルは日記の口調を取っているだけなのである。このことで文句を言う必要はあるまい。なぜなら、ケンペルに対して歴史家の称号を認めないということは、

取りも直さず堂々とケンペルをこの撰集に入れられるということだからだ⁴⁾。ケンペルの『日本誌』は外国人による旅行記であり、博物誌であった。その記述内容は、そもそも事典に取り入れられやすいものであったと言える。

ここで『日本誌』の構成を詳しく見ておこう。まず本論に先立って、著者による序文や英訳者によるケンペルの伝記などがある。図版の説明もここに置かれている。本論は五つの「巻」に分けられているが、これは「章」の上位区分であり、書物の物理的単位ではない（1729年デン・ハーグ版のフランス語訳は二冊より成り、一冊目に第三巻までが、二冊目に第四巻以降が収められている）。

第一巻は「日本の概論的記述」と題され、十一の章を含む。日本にやってくる前に立ち寄ったシャム王国の記述にも、かなりの紙数が割かれている。日本の地勢を五畿七道六十八国に分けて紹介した後に、日本人の起源についての見解が表明されている。鉱物、植物、動物の記述がこれに続く。

第二巻には「日本の政治状況」という総題のもとに六つの章が集められているが、中心になるのは歴代の天皇と将軍の年代記である。ケンペルは前者を宗教的世襲の皇帝と呼び、後者を世俗的皇帝と呼ぶ。ケンペル来日時の世俗的皇帝は徳川綱吉である。

第三巻は「日本における宗教の状況」と題され、神道、仏教、儒教の三つが論じられている。もちろん、扱い方にはかなりの差があり、神道については祭祀の様子が克明に報告されているのに対し、儒教については二ページしか触れられていない。

第四巻はオランダ商館のあった長崎の記述に当てられている。日蘭間の交易についてももちろんのこと、ポルトガルやスペインが追放されるに至った経緯についても論じられている。

第五巻は年に一度義務づけられていた江戸参府紀行の記録であり、『日本誌』の中核を成す。アベ・プレヴォなどが『日本誌』を旅行記と見なす所以である。江戸における将軍綱吉への謁見の様相を初め、道中の大都市である

大坂や都(京都)、さらには都にいるもう一人の皇帝たる天皇についても詳しく記されている。

以上で本論は終わっているが、独立した内容を持つ論考がいくつか付されている。茶や製紙法など、産業に関わるものが多いが、最も有名なのは鎖国の是非を論じた章であろう。

さて、『日本誌』第一巻の第四章と第五章は地誌に当てられている。最初の三章は日本到着以前のことを記した部分であり、実質的な日本の記述はここから始まる。第四章が総論で、第五章が地方ごとの各論となっている。注目すべきは第五章で、分量にして十ページにすぎないにもかかわらず、『百科全書』では三十にも及ぶ地名項目の典拠として活用されている。しかもそのほとんどがジョークールによって執筆されており、彼がこの章を系統的に利用したことが分かる。

しかし、ケンペルが論じるのは五畿七道六十八国(老岐対馬を含む)に及び、ジョークールはそのすべてを項目として採用したわけではなかった。取捨選択の基準は何であったのか、それを明らかにするために、一覧表を三つ作成する。第一の表は、ケンペル『日本誌』に取り上げられた五畿七道六十八国を、叙述の順序に従って一覧にしたものである。『百科全書』に対応する項目があれば、その見出し語を右に添える。ケンペル以外の典拠をもとに執筆された項目も存在するので、それらについても見出し語を掲げておこう。第二の表は、『日本誌』第一巻第五章に基づいて執筆された『百科全書』の項目の一覧で、これは『百科全書』の順序に従って配列してある。第三は、『百科全書』に収録された日本の旧国名を扱った同種の項目でありながら、『日本誌』以外の文献を典拠とするものの一覧表である。これも収録順に配置する。これら三種類の表を総合的に読み解くことによって、日本の旧国名という具体例に即して、『百科全書』における文献の利用法の実態に迫りたい。

1 ケンペル『日本誌』第一巻第五章に登場する固有名詞の表

ケンペルによる叙述は系統的で、最初に国の名前を二通りに掲げる。山城の国を例に取れば、Jamasijro（山城）と Sansju（山州）の二種類の表記を示すのである。この方法は『百科全書』の項目の見出しにも影響を与えているが、日本語の知識を持たない者にとってはかなり分かりづらい面がある。たとえば、讃岐の国も讃州と表現すれば Sansju とローマ字表記せざるをえず、『日本誌』の読者は混乱したに違いない。『百科全書』の項目の見出し語も別名を採用したりしなかったりで、非常に不規則になっている。

名称の次には、広さや土壌の良し悪しが簡単に述べられ、その国に属する郡の名前が逐一示される。『百科全書』の項目もほぼ同じ体裁を取るが、郡については数を示すにとどめている⁵⁾。

『日本誌』における表記	該当する『百科全書』の項目の見出し	『日本誌』以外を典拠とする項目の見出し
Gokinai(五畿内)	なし	なし
Jamasijro(山城)/Sansju	SANSJU	なし
Jamatto(大和)/Wosju	なし	なし
Kawatzij(河内)/Kasiu	なし	CAVACHI
Idsumi(和泉)/Sensju	なし	なし
Sitzu(摂津)/Tsinokuni	SITZU	なし
TOOKAIDO(東海道)	TOOKAIDO	なし
Iga(伊賀)/Isiju	なし	なし
Isie(伊勢)/Sesju	なし	ISJO ou IXO
Ssima(志摩)/Sisio	SISIO ou SSIMA	なし
Owari(尾張)/Bisju	なし	なし
Mikawa(三河)/Misiu	MICAWA, selon le pere Charlevoix, & MIRAWA dans Kæmpfer ⁶⁾	なし
Tootomi(遠江)/Jensiju	TOOTOMI	なし
Surunga(駿河)/Siusju	SURUNGA ⁷⁾	なし
Kai(甲斐)/Kaisiu/Ksjoohu	KAI	CAI
Idsu(伊豆)/Toosju	なし	なし
Sangami(相模)/Soosiu	SANGAMI ou SOOSIN ⁸⁾	なし
Musasi(武蔵)/Busiu	なし	なし
Awa(安房)/Foosiu	なし	なし

Kadsusa(上総)/Kooosju	なし	CANZULA
Simooosa(下総)/Seosju	SIMOOOSA, autrement <i>Seosju</i>	なし
Fitats(常陸)/Sjoo	SJOO	なし
TOOSANDO(東山道)	TOOSANDO	なし
Oomi(近江)	なし	OMI
Mino(美濃)/Diosu	なし	MINO
Fida(飛騨)/Fisju	なし	なし
Sinano(信濃)/Sinsju	SINANO, autrement <i>Sinsju</i>	なし
Koodsuke(上野)/Dsiosju	なし	なし
Simoodsuke(下野)/Jasju	SIMOODSUKÉ	なし
Mutsu(陸奥)/Oosju	なし	OXU および OCHIO
Dewa(出羽)/Usju	なし	なし
FOKU ROKKUDO(北陸道)	なし	なし
Wackasa(若狭)/Siakusju	WACKASA, autrement <i>Siakusju</i>	なし
Jetsissen(越前)/Jeetsju	なし	なし
Kaga(加賀)/Kasju	なし	なし
Noto(能登)/Seosju	なし	なし
Jeetsju(越中)/Jaessju	なし	なし
Jetsingo(越後)/Jeesju	なし	なし
Sado(佐渡)/Sasju	SADO <i>ou</i> SASJU	なし
SANINDO(山陰道)	SANINDO	なし
Tanba(丹波)/Tansju	TANBA, autrement TANSJU	なし
Tango(丹後)/Tansju	TANGO	なし
Tasima(但馬)/Tansju	TASIMA	なし
Imaba[sic](因幡)/Insju	なし	なし
Fooki(伯耆)/Fakusju	なし	なし
Idsumo(出雲)/Unsj	なし	なし
Iwami(石見)/Sekisju	SEKISJU	なし
Oki(隠岐)/Insju	なし	なし
SANJODO(山陽道)	SANJODO	なし
Farima(播磨)/Bansju	なし	なし
Mimasaka(美作)/Sakusju	なし	なし
Bidsen(備前)/Bisju	なし	*BIGEN
Bitsju(備中)/Fisjn	なし	*BITCHU <i>ou</i> BITCOU
Bingo(備後)/Fisju	なし	なし
Aki(安芸)/Gesju	なし	なし
Suwo(周防)/Seosju	SUWO	なし
Nagata(長門)/Tsiosju	なし	NAUGATO
SAIKAIDO(西海道)	SAIKAIDO	なし

Tsikudsen(筑前)/Tsikusiu	TSIKUDSEN	CHICUIEN
Tsikungo(筑後)/Tsikusju	TSIKUNGO	なし
Budsen(豊前)/Foosju	なし	BUGEN
Bungo(豊後)/Toosju	なし	BUNGO
Fidsen(肥前)/Fisju	なし	FIGEN
Figo(肥後)/Fisju	なし	なし
Fiugo(日向)/Nisju	なし	なし
Oosumi(大隅)/Cusju	なし	なし
Satzuma(薩摩)/Satsju	SATZUMA	なし
NANKAIDO(南海道)	なし	なし
Kijnokuni(紀伊の国)/Kisju	なし	なし
Awadsi(淡路)	なし	なし
Awa(阿波)/Asju	なし	なし
Sanuki(讃岐)/Sansju	SANUKI	なし
Ijo(伊予)/Josju	なし	なし
Tosa(土佐)/Tosju	TOSA ou TOSSU	なし
Iki(老枝)/Isju	なし	なし
Tsussima(対馬)/Taisju	TSUSSIMA	なし

『日本誌』第一巻第五章は、各国の説明を一通り済ませた後で、将軍の絶対的な権力について簡単な説明を試みている。その部分も別の項目の典拠となっているのだが、記述の性質が異なるので、ここでは取り上げない⁹⁾。

この表を検討してみると、ケンペルに基づいて執筆された項目には、地域としてのまとまりがないことが分かる。項目の取捨選択は、地域性とは無関係である。七道についても北陸道と南海道は外されており、大きな単位だから項目として立てるという方針があったわけでもないようだ。また、『日本誌』以外を典拠とする項目との補完性も曖昧である。筑前のように複数の項目で取り上げられた国もあれば、一切言及のない国も数多い。こうした一連の不徹底の先に隠された秩序を明るみに出すには、『百科全書』に収められた通りに項目を配列し直す必要がある。

2 『日本誌』第一巻第五章を典拠とする『百科全書』の項目の表

すでに1の表によって明らかなように、『日本誌』第一巻第五章には七十

六の固有名詞が登場するが、この部分をもとに執筆された『百科全書』の項目は三十にとどまる。以下にこれらの項目を、『百科全書』に収録された順番に従って、一覧表にまとめておく。見出し語は『百科全書』にある通りのもので、見やすいように日本語を添えてある。執筆者については特に説明するまでもなからう。項目の所在というのは、その項目が『百科全書』の第何巻何ページにあるかを示している。ローマ数字は巻、アラビア数字はページを指す。『百科全書』は二段組で印刷されており、左右の違いを小文字の a と b で表わした。項目はおおむね短い、長いものについては項目の始まりと終わりの数字を示し、ハイフンでつないである(同一ページで左右の欄にまたがっているものについてはハイフンを省いた)。

項 目 名	執 筆 者	項目の所在
KAI(甲斐)	無 署 名	IX, 106b
MICAWA, selon le pere Charlevoix, & MIRAWA dans Kæmpfer(三河)	ジョクール	X, 485b
SADO ou SASJU(佐渡あるいは佐州)	ジョクール	XIV, 486a
SAIKAIDO(西海道)	ジョクール	XIV, 516b
SANGAMI ou SOOSIN(相模あるいは相州)	ジョクール	XIV, 617ab
SANINDO(山陰道)	ジョクール	XIV, 626b
SANJODO(山陽道)	ジョクール	XIV, 626b
SANSJU(山州)	ジョクール	XIV, 627a
SANUKI(讃岐)	ジョクール	XIV, 632b
SATZUMA(薩摩)	ジョクール	XIV, 705b-706a
SEKISJU(石州)	ジョクール	XIV, 903b
SIMOODSUKE(下野)	ジョクール	XV, 204ab
SIMOOSA, autrement Seosju(下総または総州)	ジョクール	XV, 204b
SINANO, autrement Sinsju(信濃または信州)	ジョクール	XV, 206b
SJOO(常)	ジョクール	XV, 221b
SISIO ou SSIMA(志州あるいは志摩)	ジョクール	XV, 228b
SITZU(摂津)	無 署 名	XV, 233a
SURUNGA(駿河)	ジョクール	XV, 697b

SUWO(周防)	ジョクール	XV, 709a
TANBA, autrement TANSJU(丹波または丹州)	ジョクール	XV, 881b
TANGO(丹後)	ジョクール	XV, 885b
TASIMA(但馬)	ジョクール	XV, 933b
TOOKAIDO(東海道)	ジョクール	XVI, 415b
TOOSANDO(東山道)	ジョクール	XVI, 415b
TOOTOMI(遠江)	ジョクール	XVI, 415b
TOSA ou TOSSU(土佐あるいは土州)	ジョクール	XVI, 441ab
TSIKUDSEN(筑前)	ジョクール	XVI, 730b
TSIKUNGO(筑後)	ジョクール	XVI, 730b
TSUSSIMA(対馬)	ジョクール	XVI, 732a
WACKASA, autrement Siakusju(若狭または若州)	ジョクール	XVII, 583a

一見して明らかなように、執筆者はジョクールに偏っている。わずかに KAI と SITZU の二つが無署名であり、全体として均一なまとまりを形成している。

次に、見出し語の頭文字が S 以降のものがほとんどであることにも気づく。実際、所在を見れば、第十四巻以降に集中している。KAI と MICAWA は例外的と言える。特に KAI は無署名という意味でも異質な項目である。これら三十項目には、S 以降の文字で始まり、ジョクールによって書かれている、という共通点が認められる。おそらく、SITZU もジョクールが執筆したもので、何らかの事情で署名が抜け落ちたのだろう。それでは、『日本誌』以外を典拠とする同種の項目には、何らかの共通点を見出しうるであろうか。

3 『日本誌』第一巻第五章以外を典拠とする『百科全書』の項目の表

最後に、日本帝国を構成する国の名前を見出し語とする『百科全書』の項目のうち、ケンベルの『日本誌』以外を典拠とする十六項目を表にして掲げる。表の構成方法は基本的に 2 と同じであるが、典拠と考えられる文献を付

け加えた。

項 目 名	執 筆 者	項目の所在	典 拠
*BIGEN ¹⁰⁾ (備前)	ディドロ	II, 247a	ブリエ
*BITCHU <i>ou</i> BITCOU ¹¹⁾ (備中)	ディドロ	II, 267a	ブリエ
BUGEN ¹²⁾ (豊前)	無署名	II, 460a	ブリエ
BUNGO ¹³⁾ (豊後)	無署名	II, 464a	ブリエ
CAI ¹⁴⁾ (甲斐)	無署名	II, 531b	ブリエ
CANZULA ¹⁵⁾ (上総)	無署名	II, 624a	ブリエ
CAVACHI ¹⁶⁾ (河内)	無署名	II, 781a	ブリエ
CHICUIEN ¹⁷⁾ (筑前)	無署名	III, 627a	ブリエ
FIGEN ¹⁸⁾ (肥前)	ジョクール	VI, 744b	シャルルヴォワ
ISJO <i>ou</i> IXO ¹⁹⁾ (伊勢)	ジョクール	VIII, 913b	シャルルヴォワ
MINO ²⁰⁾ (美濃)	無署名	X, 557a	シャルルヴォワ
NAMBU ²¹⁾ (南部)	ジョクール	XI, 11a	ブリエ
NAUGATO ²²⁾ (長門)	ジョクール	XI, 51a	シャルルヴォワ
OCHIO ²³⁾ (奥州?)	ジョクール	XI, 337a	ブリエ
OMI ²⁴⁾ (近江)	ジョクール	XI, 469a	シャルルヴォワ?
OXU ²⁵⁾ (奥州)	ジョクール	XI, 728b	ブリエ

今度はアルファベット前半のものが多いが、よく見ると二種類に分けられそうである。第一は *BIGEN から CHICUIEN に至るまでの八項目で、これらはディドロが執筆し、ブリエ神父の日本地図をふまえていると考えられる。無署名のものが多いが、典拠との関連を考えると、同一人物の手になる可能性が極めて高い。しかも、無署名項目はディドロのものというのが『百科全書』本来の取り決めであったから、この推定には十分な根拠がある²⁶⁾。

これら八項目は第三巻までに集中している。第二のまとまりは、FIGEN から OXU までの八項目で、MINO 以外にはジョクールの署名があり、シャルルヴォワ神父の『日本史』に基づくものが目立つ。第十一巻所収の項目が多い。

さて、以上三つの表を見比べてみると、次のように推定しうるのではないだろうか。

『百科全書』の編集責任者であるディドロは、外国の地名を見出し語にした項目を積極的に採用する方針を立てた。特に専門家に依頼する必要のない項目は、ディドロが編集責任者として執筆することになっていたから、日本の地名もディドロが担当した。星印については厳密な運用をしておらず、星印を欠いたものもディドロ執筆と見なしうる。項目執筆に際しては、ディドロはイエズス会士ブリエ神父の作成した日本地図を典拠として利用した。この状態はせいぜい第三巻までしか続かなかった。

ディドロは第四巻から日本の旧国名を見出し語にした項目の執筆を放棄する。代わって、第六巻辺りからジョクールがこの分野を引き継ぐが、典拠として活用する文献も定まらず、方針は不確かなままである。その中では比較的シャルルヴォワ神父の『日本史』の利用頻度が高い。

第十四巻に収録されたS以降の項目になって、ジョクールはケンペル『日本誌』第一巻第五章に基づいて、系統的に日本の国名を見出し語にした項目を書くようになる。可能であれば、五畿七道六十八国すべてを取り入れたいところだったが、Sより前の文字については手遅れである。七道のうちの五つ、六十八国のうちの二十五カ国で我慢するより仕方がなかった……。

改めて確認しておくと、ケンペル『日本誌』第一巻第五章に登場する固有名詞のうち、頭文字がSより前のもの(P, Q, Rで始まる単語がないので、頭文字がOまでという言い方もできる)は、ほとんど『百科全書』に取り入れられていない。例外はJamasijro(山城)とIwami(石見)の二つだけで、いずれも別名のSansju(山州)とSekisju(石州)が見出しに立てられている。この方針を押し通せば、もっと多くの項目を取りこむことができたはずであるが、その点は徹底されておらず、原因もよく分からない。確かなことは、アルファベットでS以降の頭文字を持つ国の名前が、一つの例外もなく、ジョクールによって『百科全書』の項目として採用されていることである。

終わりに

地名を見出し語にした項目は、ほとんどが数行程度の短いものであり、それ自体のうちには重要な思想を読み取りようがない。しかし、たとえば日本の旧国名のようなまとまりを取り出し、これを系統的に分析してみると、編集方針とも言うべきものが垣間見える。ディドロからジョークールへとという執筆者の移行は、多くの小項目群にもそのまま当てはまり、『百科全書』の成立の本質に関わる問題と言える。利用される典拠一つを取っても、ディドロとジョークールでは違いがあり、それが項目の内容に反映されている。

地名のような小項目は、いわば典拠研究の突破口である。日本の旧国名を見出し語とする項目の分析によって、ジョークールがケンペルの『日本誌』を信頼しうる文献と見なして利用し尽くしていること、それに対してディドロはこれをあまり役立てていないことが明らかになった。もっと重要な内容を含む項目を研究する場合でも、このような文献に対する接し方の違いを考慮に入れる必要がある。

- 1) 小関武史「『百科全書』研究にとっての典拠調査の意義」、『一橋論叢』第123巻第4号、704—718頁。
- 2) <Avertissement>, *Encyclopédie*, t. VIII, p. j.
- 3) Jean Haechler, *L'Encyclopédie de Diderot et de... Jaucourt. Essai biographique sur le chevalier Louis de Jaucourt*, Paris, Honoré Champion, 1995.
- 4) Prévost (éd.), *Histoire générale des voyages*, t. 10, p. 484.
- 5) 『日本誌』の記述は、ほぼそのまま『百科全書』に写されている。代表例として山城の国に関する説明を取り上げる。まずは『日本誌』の記述から示す。<1. Jamsijro, autrement Sansju. C'est un pays fort étendu & très fertile. Sa longueur du Sud au Nord est de cent miles du Japon ; & il contient plusieurs bonnes Villes, & autres places considerables. Cette Province est divisée en huit Districts, Otokuni, Kadono, Okongi, Kij, Udsi, Kusse, Sakanaka, & Tsukugi.> (Kæmpfer, *Histoire du Japon*, t. 1, p. 61.) これに対応する『百科全書』の項目は以下の通りである。<SANSJU, (Géog. mod.) une des cinq pro-

vinces impériales du Japon dans l'île de Nippon. C'est un pays fort étendu, très-fertile, & qu'on divise en huit districts. Sa longueur du sud au nord, est de cent milles du Japon. Il contient plusieurs bonnes villes, & autres places considérables. (D. J.)>

- 6) 項目筆者のジョクールは、シャルルヴォワ神父によれば MICAWA と綴り、ケンベルにおいては MIRAWA と書くこと述べているが、ケンベル『日本誌』でも正しく Mikawa となっている。
- 7) 『百科全書』には SURUNGA という項目が二つあり、一つは国としての駿河、もう一つはその中心都市の駿府の記述に当てられている。
- 8) 項目執筆者のジョクールは、原文の最後の u を n に写し間違えている。
- 9) ジョクールは項目 JAPON, *le* の中ほどで、Taïco (太閤) による「革命」に端を発する世俗的皇帝の絶対的権力の確立を、『日本誌』のこの部分を下敷きにして説明している。(Encyclopédie, t. VIII, p. 454a.)
- 10) イエズス会士ブリエ神父が十七世紀に作成した日本地図 (Ph. Briet, *Royaume du Japon.*) を見ると、備前の国は BIGEN と記してあり、この項目の綴りと一致する。また、ブリエの地図では国の名前が全部大文字で、その国の首都は頭文字のみ大文字で記してあるのだが、ほとんどの国において首都の名前が国の名前と同じになっている。『百科全書』の項目 BIGEN には「日本帝国に從属する王国にして都市」という説明があり、国名であると同時に首都名でもあるという誤解は、もっぱらこのブリエ神父の地図に由来するものと考えられる。こうした間違いはケンベルの『日本誌』には見当たらず、典拠を推定するには有力な手がかりになる。
- 11) ブリエの日本地図の綴りと合致する。
- 12) 無署名項目であるが、ブリエの日本地図の綴りと合致することから判断して、ディドロが書いたものと推定しうる。
- 13) これもブリエの日本地図の綴りと合致し、ディドロ執筆と推定しうる。
- 14) 同様にブリエの日本地図の綴りと合致し、ディドロ執筆と推定しうる。
- 15) ブリエの日本地図には Canzusa と記されている。この時代の活字は小文字の s が縦に細長く作られており、f や l と取り違えられる可能性があった。注 23) で列挙した国名に含まれる l は、いずれも s と読み替えられるべきものである。この項目は無署名だが、執筆者はディドロであろう。
- 16) ブリエの日本地図では Cauachi と綴る。小文字の u が大文字では V と表記される例は多く見られる。ディドロ執筆と推定しうる。
- 17) ブリエの日本地図の綴りと合致し、ディドロ執筆と推定しうる。

- 18) シャルルヴォワの『日本史』をふまえる。(Charlevoix, *Histoire du Japon*, 1754, t. 1, p. 36.)
- 19) シャルルヴォワの『日本史』の表記と同じだが、典拠という確証はない。(Charlevoix, *Histoire du Japon*, 1754, t. 1, p. 174.)
- 20) 美濃はケンペルでもシャルルヴォワでも Mino と綴るが、内容から判断すると典拠はシャルルヴォワであろう。(Charlevoix, *Histoire du Japon*, 1754, t. 2, p. 320-323.)
- 21) プリエの日本地図には NANBV とある。注23) 参照。
- 22) シャルルヴォワの『日本史』の表記と同じである。(Charlevoix, *Histoire du Japon*, 1754, t. 2, p. 51, 53.)
- 23) 「日本島にある日本の国で、十一の州を含み、その首都は江戸である」というのが項目の全文であるが、このような奇妙な記述になったのは、プリエ神父の地図が不正確だからである。そこには確かに白抜きの字で OCHIO と記された部分があり、他と二重の点線で境界が区切られている。OCHIO に含まれる州は、MULAXI (武蔵), AVA (安房), Canzula (上総), XIMOLA (下総), Ximocouque (下野), Fitaqui (常陸), VOXV (奥州), DEVA (出羽), Aizu (会津), NANBV (南部), AQUITA (秋田) の十一に達する。
- 24) シャルルヴォワの『日本史』の表記と同じだが、典拠と言い切れる記述を見出せない。
- 25) プリエの日本地図には OXV という地方がある。OCHIO とは別で、三陸海岸辺りに相当する。
- 26) リチャード・シュワブは、星印のついた項目に関して重要な指摘を行っている。「第二巻の272ページ以降、ディドロは地理を扱った無数の短い項目に編集者としての星印を打つことを、事実上やめてしまった。これら地理項目は星印つきの項目の大きな部分を占めている。あるいは、ディドロはこうした項目の執筆を誰かに委ねたのかもしれない」(Richard N. Schwab, <Introduction>, *Inventary of Diderot's Encyclopédie*, in *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, t. 80, Genève, Institut et Musée Voltaire, 1971, p. 44.) 星印のついた項目 *BITCHU ou BITCOU は第二巻の267ページにあり、シュワブの観察を裏づける。

(一橋大学専任講師)